

龍谷教学会議第47回大会

乃至十念の仏意
仏の口業と衆生の聞名との関係
(申請原題名) 仏の口業を衆生の聞名に繋ぐ橋

浄土真宗本願寺派
滋賀教区滋賀組正覚寺
愚住 堅田 玄宥

総説

110626 Ver.4-1

- 私は、末寺末端、伝道最前線を与る住職・布教使であります。いきなり本題に入ります。
- 私なりに頂戴致しますと、伝統宗学が抱える課題は、
- 第一に大行を、本願の名号として衆生の行位の称名を認めてこなかったことにあり、
- 第二に、信前行後を標榜する信因称報説を踏襲して信心と念仏とを対立概念として扱い、念仏は信心獲得後の報恩感謝に限るとしてきたことにあるかと窺います。
- 然るに、現代社会は、目に触れ、耳に聞こえないでは把握しかねる実証主義習慣の世の中で、かかる時代環境にあっては、衆生の具体的行い(プラクティス)を明示しえずしていかにしてか新たに他力念仏者の誕生・育成を期待しうるか憂慮するものであります。
- では、果たして、宗祖教義には、衆生行位の具体的行いの可能性はないのでしょうか。
- 本論文では、「大行とは無礙光如来の名を称するなり」と仰せ下さった行巻は宗祖の大行出来の御意を、問いを改めてお訊ねし直し、「名聲超十方」と重ねてお誓い下さった仏意に則して、証巻の還相回向釈を援用すれば、衆生の聞名は、仏の口業(衆生の行)の回向を通して齎らされていたのではないかという旨を提起させて戴きたいと存じます。

はじめに

- さて、四十八願経の『無量寿経』成就文では、「諸仏如来の讚嘆の名号を衆生が聞名することによる救い」が説かれる一方において、同第十八願文では、「聞名」が誓われず、「乃至十念」が誓われております。
- そこで、その仏意を窺い、「乃至十念」が衆生の「聞名」に繋がるプロセスを明確化するのが本論文の本質的課題であります。

課題のありか

- はじめに、伝統教学の概要をレビュー致します。
- その伝統教学では、第十七願を能所に二分し、称揚の「広讚」を無量寿経教説の側(能讚位)に据え、教説が説き明かす名号を所讚位だと理解し、行巻はこの所讚の名号について説いたものだと解釈されて来たと言われております(Ref P11)。
- これでは、大行出体「大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」が正しく名号を称える略讚(衆生の行位)であるにも関わらず、顧慮されていないのではありますまいか。
- 果たして、親鸞聖人は、行巻の「**称名破満積**」で「称名能破衆生一切無明、能満衆生一切志願。称名則是最勝真妙正業…(Ref 全P8、註P146、**Ref 478**)」とお示しです。この御文は、曇鸞大師の『往生論註』の「名号破満」の御文を借用して「名号」を「称名」とされたものであります。
- これは、行巻の主題が「名号」ではなくて、衆生の行位たる「称名」であることが明瞭に知られるところであります(Ref P130、 P162)。

大悲の願(第十七願)より出でたり

- 親鸞聖人は、「大行は大悲の願(第十七願)より出でたり」とお示しになって、法然聖人が「選択本願の行」とおっしゃった第十八願の「乃至十念」の根底には、諸仏如来の名号讚嘆が存するとして第十七願によって行を建立されています(Ref P242)。
- そこで、願名を振り返りますと、行巻では、「諸仏称揚之願」「諸仏称名之願」「諸仏咨嗟之願」「往相回向之願」「選択称名の願」とし(Ref 行巻、註P141、全2-P5)、更に、『浄土文類聚鈔』では、「往相正業の願」(Ref 註P478、全2-P443)と名づくべしと仰せであります。
- このうち、「**選択称名の願**」と「**往相正業の願**」が紛れもなく衆生の行位に当る称名の根拠であり、はその行自体が本願力廻向されている旨を示したものであります。
- 更に、及びも「諸仏とひとし」(Ref 註P778、全2-P667))の視点から衆生の行位に当る根拠となります。
- このようにして、願名を根拠に見た場合、衆生の行位たる称名を認めない立場は、宗祖の御意に則しないことになるのではないのでしょうか。

衆生行位の称名を無理なく認める根拠

- 従前、伝統教学が、衆生の行位たる称名を認めてこなかったのは、自力の関与の余地を懸念したからだと言われております。
- そうすると、衆生の行位の称名が認められるには、衆生の行位を認めたとしても自力の関与の懸念を根底から払拭する論理の発見が必須になって参ります。
- 私は、衆生行位の称名を無理なく認める根拠が実は**口業自体が本願力廻向されていた**のではないかと窺います。
- では、そのような本願力廻向されている大行とは、一体如何なるものからして把握することができるでありませんや。

本願力廻向されている大行とは

- *これには既に宗祖御自身が端的に回答を与えておいでです。*
- つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは無礙光如来の名を称するなり(Ref『行文類』註P141) の御文がこれに当たるからです。
- 宗祖は名を称することが大行だと仰せだからです。同時にこの御文が名を称することが往相回向されている端的な文証であります。
- ところが、註釈版聖典のご本典の解説では、「第二の行とは、本願の名号であって、破闇満願の力用をもち衆生を往生成仏せしめる行法である」と名号に帰ってご説明になります(Ref:「註釈版」P130)。
- *これはまことに不思議なことであります。*

僧侶の使命は、名号の働きの具体的な お姿を示すことではなかったか

- 僧侶の使命は、名号の救いの働きのお姿を具体的に示すことができなくてはならないのに、敢えて名号に込めることは、名号が聲になってお救い下さる具体的な働きのお姿を隠してしまうことになるのではないのでしょうか。
- この点、伝統教学は、宗祖親鸞聖人の御文を疑っているようにも見受けられます。
- それなら、ご本典に現れた明確な経論釈の根拠を探して見る事に致しましょう。

声、口誦、耳に聞く出扱を訪ねる

- 我至成仏道 名聲超十方 究竟靡所聞 誓不成正覺(Ref:『大經、重誓偈』、註p24、行卷引文、註P141)。
- 「いかなる聲名かましますと知るべし。このゆゑに次に仏の口業を莊嚴したまへるを觀ず。すでに名聞を知んぬ、よろしく得名のゆゑを知るべし」(Ref 証卷、『往生論註』「仏八種功德」註P317、全2-P109)。
- 『無量壽經』にいふがごとし。<もしわれ成仏せんに、十方の衆生、わが名号を稱せん、下十声に至るまで、もし生れずは正覺を取らじ>と。…本誓重願虚しからず(Ref: 『行卷』註P167、七註P711善導大師『往生禮讚』「本願取意の文」)。
- 選択本願(第十八願)には、「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覺」(禮讚)と申すは、弥陀の本願は、とこゑまでの衆生みな往生すとしらせんとおぼして十声とのたまへるなり。念と声とはひとつところなりとするべしとなり。念をはなれたる声なし。声をはなれたる念なしとなり。」(Ref 「行卷」、全書第二卷P20、註p167、Ref の2『唯信抄文意』「十一」觀經下々品と選択本願(禮讚)」註P716))
- わが弥陀は名をもって物を接したまふ。ここをもって耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す(Ref: 「行卷」元照律師、『弥陀經義』註p180)。

(經)重誓偈

- 我至成仏道 名聲超十方 究竟靡所聞 誓不成正覺(Ref:『大經、重誓偈』、註p24、行卷引文、註P141)。
- 重誓偈は、四十八願が誓われた直後の御文であります。
- これについては、深川和上が宗報「聞思録」で次の様に仰せです。
- 「如来様は、衆生をどうやって救うか五劫思惟なさって、全功徳を衆生に回向して仏名に成就し、その声になって救うと決められた。これを名聲という。聲になる名である。衆生の称名になる前に名号ができ、それが衆生に回向され称えられるという理解は正当でない」(Ref深川 倫雄和上 平成20年9月「宗報一聞思録」)

(論) 仏八種功德の口業

- 証巻引文の『往生論註』の御文、就中、「仏八種功德」、その中心が
- 「いかなる声名かましますと知るべし。このゆゑに次に仏の口業を莊嚴したまへるを觀ず。すでに名聞(みょうもん)を知んぬ、よろしく得名のゆゑを知るべし」す(Ref 証巻、註P317、全2-P109)。
- ここで、「名聞」とは、名号のいわれがあらゆるところに聞こえることを申します(Ref 証巻、註P317脚注)。
- 口語訳では一步進めて(下線部に留意)「どのような名号をあらわされたのかを知らなければならない。そこで次に仏の口業にそなわる功德を觀ずる。口業により仏の名号があらゆるところに聞こえることを知ったなら、その名号を得られた理由をしらなければならない」とあります(Ref 証巻、現P348)。
- ところで、原文では「声名」とあるのに、口語訳で「名号」としてしまわれている個所は注意深く、原文の「声名」で読み取るべきかと窺います。
- 聲名の「聲」は、よく見れば、声に発生せられたものを耳で聞きとめると読みとれる大切な字だと窺えますから安易に置き換えてはならない筈だからです。

阿弥陀如来を増上縁とする

- お名号があらゆるところに聞こえるのは、実は阿弥陀如来の口業に備った功德であることが明かされているのではありますまいか。
- この御文は、証の巻、還相回向釈の引文であります。
- 何故、還相回向釈に示された仏八種功德が衆生の往相に働きかけるかと言うと、阿弥陀如来を増上縁とする (Ref「行巻一覈求其本釈(かくごほんじゃく)」註釈版P192) からだと解されます。
- 阿弥陀如来のお悟りの功德である仏の口業自体が実は証果の悲用として還相回向され、衆生の往相に働きかけていたことになるのではないのでしょうか。

(釈) 行巻の引文三種 (概略)

- 善導大師の「本願取意の文」(Ref: 「行巻」註P167、『往生礼讃』七註P711)
これは、行巻で『無量寿経』にいふがごとしと仰せになった上でお示しになる御文であり、信心については言及されていません。
- わが弥陀は名をもって物を接したまふ。ここをもって耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す(Ref: 「行巻」元照律師、『弥陀経義』註p180)。
元照律師のこの御文は、名をもって衆生をお救い下さる具体的なお姿が、耳に聞き、口に誦することであると示して下さいます。
- 『唯信抄文意』(11) (Ref: の2『唯信抄文意』「観経下々品と選択本願(礼讃)」註P716)。これは、礼讃の本願取意の御文を押さえて、念と声とはひとつころなりと示された親鸞聖人の和語のお聖教であります。

中締め結論

- つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは無礙光如来の名を称するなり(Ref: 『行文類』 註P141) の御文について、経論釈(含む、ご自釈)を文証として言える結論は、
- 往相回向の「大行」の具体的お姿は、仏の声、口誦、口業であると窺います。
- 大行とは無礙光如来の名を称するなりと、敢えて言外に主語を置かれたのは、往相回向の主体は阿弥陀如来であって、お救いの目当てである被回向者が具体的主体であることを含みとされたものと窺うことができます。
- 高校生にも判り易く表現しますと、選択本願の太いロジックは英文のSV00の構造で捉えうると説明できます。主語は、阿弥陀如来、間接目的語が被回向者の往生人、残る直接目的語が、証巻に明かされた「仏の口業」であります。

乃至十念は往相回向の仏の口業

- かくして、第十八願文の「乃至十念」は、具体的には、「仏の口業」を衆生の口業としてお与え下さったものと頂戴できます。
- このように頂戴することは、
- 既に、善導大師、法然聖人が「乃至十念」の「十念」は「十声の称名」に当たると確定して下さった師資相承に則するものであり、
- 更に、十声の称名の本質(仏回向の口業)を明るみに出したことになるのではないかと窺われます。

乃至十念は仏の口業と頂戴する効果

- 「乃至十念」を衆生の行として仏が回向して下さった
仏の口業と頂戴することの効果



- 「称名」が自力である懸念が払拭できます。
- 蓋し、『選択集』引用結釈で「これ凡聖自力の行にあらず。ゆゑに不回向の行と名づくるなり(Ref 行巻、註 P186、全2-33)と仰せの通りです。

大行出体の構造再考

- そこで、「大行出体—大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」の構造を再考しますと、
- その形は、口業であります。

「称するなり」とあるからです。尚、その本質は、証巻の還相回向に明かされた所回向の仏の口業が、行巻の往相回向では衆生の口業として明示されていると窺われるからです。次に、
- 口業の実体は、讚嘆門であります。

この讚嘆門に照らして衆生の口業が諸仏如来の名号讚嘆に匹敵することになります。

「往相の回向を案ずるに、大行あり」の文脈に照らして、如来回向の口業だったからです。

往相回向の**大行(口業)**は**讚嘆門**となる

- 「大行が諸仏如来の名号讚嘆に匹敵することになる」のは、親鸞聖人の和語のお聖教に明らかです。すなわち、
- 1)まず、「**即嘆佛**」といふは、**すなはち南无阿弥陀佛をとらふるは佛をほめたてまつるになるとなり**と仰せであり(Ref 『銘文』註P655、全2-587)、
- 2)次に、「願成就の文(大経・下)に『十方恒沙の諸仏』と仰せられて候ふは、信心の人とこころえて候ふ」との浄信上書に対するご返事(『末灯鈔』第七通)で、聖人もまた、「まことの信心の人をば、諸仏とひとしと申すなり」とされ、更に「信心まことなる人のこころを、十方恒沙の如来のほめたまへば、仏とひとしとは申すことなり」とおっしゃっております(Ref 『御消息』註P778、全2-P667)。

仏の口業が本願力廻向されていることの帰結

- 衆生が称える仏名はそのまま仏の口業の働いていて下さるお姿になります。その効果は、
- 阿弥陀如来と衆生が直結する途が開かれたこととなります。
- かくして、南無阿弥陀仏と称えれば、ただちに「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。これは口業独特の効果です。
- これは、阿弥陀如来の願いの通りに(三心即一の信楽[信相])本願力廻向の如来様の口業を称えた効果ですから、聞こえて下さるときは、如来様直々の勅命が聞こえて下さったと頂戴することができます。

衆生は、如来直々のお喚び声で喚び覚まされる

- 衆生は、仏回向の口業を通しての如来直々のお名号を聞いて切実に喚び覚まされる(本願成就文)ではなかったでしょうか。
- 喚び覚まされれば、何故に歡喜しうるか、
- それは、(ここでは割愛致しますが)、真の救い主との関係性の目覚めによるからだと窺われます(Ref)
- 斯かるプロセスアプローチを通して、嘗て「能所不二、鎔融無碍の法体大行(のうしょふに、ようゆうむげのほったいだいぎょう)」と觀念的に折衷説明せられ、「称即名とまきあがる」(Ref)といかにも情的な表現に収束して見えた先哲方のご苦勞も、現代社会の念仏者の信心獲得の新たな実践的ロジックとしてご案内しうるのではないかと窺います。

仏回向の口業を行わずることの効果

- 伝道現場の実際はどうなるでしょうか。
- 「南無阿弥陀仏」と称えましょう。
- すると聞こえて下さるものがある筈です。
- 「南無阿弥陀仏」です。
- これがただ今お浄土から届いて下さった如来様直々のお喚び声です。
- このように承ることによって、衆生は、いつでもどこでもたった一人でも如来様のお喚び声に遇わせて戴けるのではないでしょうか。
- これを唯単に、私の声が聞こえたただけだというのではなく、如来様直々のお喚び声と頂戴できるかどうか(三心即一の信楽如何)が衆生がお救いに与るかどうかの分かれ目となるのですから「信心正因」の御法義と矛盾するものではありません。

仏回向の口業を行わずることの効果

- このようにご案内することは衆生に生活次元の行(プラクティス)を明示することになります。
- 衆生はそのご案内によってプラクティスを通して自ら宗教的真実を体験することになります。
- 首肯できなければ、これを機縁にさりげない日常生活を通してその謂れをお聴聞になって下さいとお勧めできます。

結 論

- 四十八願経の『無量寿経』成就文で「諸仏如来の讚嘆の名号を衆生が聞名することによる救い」が説かれる一方において、同第十八願文では、「聞名」が誓われず、「乃至十念」が誓われたその訳は、

「十方の衆生に間違いなく名号を聞かしめたい」との具体的なお手立て「仏の口業の回向」をお誓い下さったものと窺うものであります。

謝 意

- 最後に、今回発表の機会をお与え戴いた御はからいに対して、深甚の謝意を申し述べます。
- まことに有難うございました。
- 取り纏めに当たり、和上様方のお手ほどきを引用致しておりますが、今回の発表内容は、私発表者一人の責に負うものであることをお断り申し上げます。合掌。

引用文献(出拠)

- (凡例)全 聖教全書、註 註釈版、現 現代語版
- 教学研鑽の立場と方法(龍谷教学第45号)
- 『真宗聖教全書三經七祖部』、『註釈版七祖篇』
- 『顕浄土真実教行証文類』
- 『浄土文類聚鈔』
- 『尊号真像銘文』、の2『唯信抄文意』
- 『如来二種廻向文』
- 『親鸞聖人御消息』(『末灯鈔真蹟七通』)
- 梯 實圓『法然教学の研究』
- 梯 實圓『教行信証の宗教構造』
- 信楽峻麿『教行証文類講義』「行巻」
- 勸学寮編『浄土三部經と七祖の教え』
- 桐谷順忍『空華学轍の思想』(龍谷教学会議 昭53年富山大会記念講演)
- 別科ご本典講義資料P2「真実五巻」の関係
- 関係性への目覚め

<http://syohgakuji.web.fc2.com/2341.pdf>

以上